

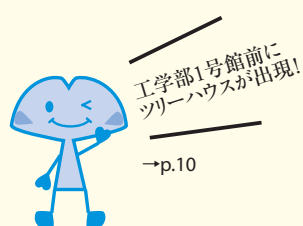
学内広報

2024.12.19

no.1589



木の無い所にツリーハウス (木村勝一)



Shape the Future, Design for Tomorrow
東京フォーラム2024

インド事務所を軸に進む南西アジアとの交流促進
インドと東大



「デザイン」とは何なのか？

青木 地球と社会をよりよく変革する戦略としての「デザイン」について考えるために、私たちは東京フォーラムに集まりました。ユーザーエクスペリエンス(UX)が専門のチェ先生、AIが専門の松尾先生、デザイン評論家であるローソンさん。まずは皆さんにとって「デザイン」とは何なのかを伺います。

チェ 私は多くの韓国のIT企業と仕事をし、PCからモバイルへの変遷だけではなく、私たちの日常のなかでのデザインの力や役割の変遷を見てきました。例えばIT業界。過去10年の間にプロダクション、マーケティング戦略などの意思決定にデザインが反映されるようになりました。政府のサービス、交通運輸といった公益事業にも広がり、今や韓国ではデザインは意思決定の際にも優先すべきものだという考えが浸透しています。私はデザインを特殊な領域として、その役割に制限を設けてはいけないと思っています。システムエンジニアやビジネスオペレーターなどさまざまな専門家と協力しながら、デザイナーの役割を拡充していくべきだと思っています。一方で懸念もあります。多くのデザイナーが、これ

からのAI時代に、ヒューマンセントリックデザイン(人間中心設計)にどのようにAIを導入すべきか迷っているということです。AIをどう扱うのか。インターフェイスの課題もあります。スマホのインターフェイス開発とは違います。デザイナーにとってのチャレンジでしょう。

松尾 短期的に考えると、AIはデザインプロセスを強化できると思います。生成AIを使うことで、試作品を短時間で作り顧客に見せることができ、反復的なプロセスが高速化することで、より高品質の製品を作れるだろうと思います。難しいのはAIが進化していくなかで、人間とAIの役割が変わっていくかもしれないということです。デザインのためにはどのようなインターアクションが最適なのか。非常に難しい問題です。

姿勢としてのデザイン

青木 ローソンさんはご著書『姿勢としてのデザイン』で「機知に富む」という言葉を使っています。デザインの文脈ではどのような意味を持ちますか？

ローソン 「機知に富む」はデザインにとって重要な資質です。歴史的には、個人やコミュニティで緊急な課題があり、それを解決するために必要なお金や資材

がなく、プロセスもない時にどう工夫をするのかという意味で使われてきました。想像力も原則も重要ですが、いかに工夫できるかがとても重要です。「姿勢としてのデザイン」はデザインの役割を制約から自由にすることです。デザイナーは、指示を受けて仕事をすることや、他分野の専門家によって大事な判断が行われた後に仕上げなどを行うことが多いです。いかにそういった制約からデザインを解放し、想像力などを発揮できるようにするか、そしていかに意思決定プロセスにデザインを入れ、他分野の専門家と協業していくかということです。

例としてソーシャルデザインのパイオニア、ヒラリー・コッタムを紹介します。彼女は世界銀行に務めていた時に、複数のアフリカの灌漑プロジェクトに関わりました。それらの成功例と失敗例を分析して浮かび上がってきたのが、ダムや灌漑システムといったもののデザインの品質が、最終的な結果に大きな影響を与えていたということです。その後、彼女はイギリスで「Participle」という社会的企業を立ち上げました。ある自治体の高齢者ケア改善プロジェクトでは、技術者や心理学者といったさまざまな専門家から構成されるチームを作り、それをデザ

初日に閉会挨拶をした藤井輝夫総長①と韓国SKグループのチェ・テウォン会長②。続いて基調講演を行ったデザイン評論家のアリス・ローソンさん③と工学系研究科の松尾豊教授④。そしてパネルディスカッション「ジェンダー・イノベーションの描く未来：科学の評価、ファンディング、教育における変化」⑤、ビジネスリーダーセッション「新たにデザインする社会・環境課題への解決策」⑥が行われました。2日目にはパネルディスカッション「インクルーシブなまちづくり：社会的共通資本を巡る都市計画学と経済学との対話」⑦、東大と韓国の大学に通う学生20名が登場したユースセッション⑧-⑫、パネルディスカッション「境界を超えるデザイン：融合、革新、そして未来への挑戦」⑬、最終セッション「明日への対話」が行われ、最後に藤井総長と崔鍾賢学術院のキム・ユンク院長⑭が閉会挨拶を述べました。総合司会はNHKアナウンサーの山本美希さんが担当しました。

アーカイブ動画はこちら→



イナーが主導しました。プロダクトデザインやグラフィックデザインといった分野の専門家です。そして、デザインプロジェクトとして取り組んだ。そうすることで、より質の高い解が見つかり、正確で精緻なものができる、彼女は強く信じていたからです。これは大成功しました。

人間のためのデザイン

チェ 人間中心設計の重要性を指摘したいです。私たちは人間のために、製品などをデザインしたり、開発しなくてはいけません。AIの領域では人間中心のAIという言葉が使われていて、とてもよいアプローチだと思います。エンジニアは人間中心のAIというものをどう定義しているのでしょうか？

松尾 AIを学習させるときはデータセットを作成します。そこには人間の価値観が反映されています。例えば画像ランキングなどを行うシステムでAIが性別、年齢といった属性を基準にすることがある。つまり私たちが使って欲しくないものを使って分類してしまうことがあります。いかにバイアスを取り除くかということも研究されていて、何が分かったかというと、バイアスのないモデルを使うとパフォーマンスが落ちてしまうということでした。非常に良いAIモデルを構築しようと思ったら、バイアスのレベルを調整しなきゃいけない。そこにトレードオフが発生します。人間社会にはバイアスが常に潜んでいます。それについてもっと考えていく必要があります。こ

れが人間中心のAIに関連すると思いますし、やはり人間が中心的役割を果たすべきだと思っています。

全ての学生がデザインを学ぶ

青木 デザインを人類が直面する大きな課題を解決するためのツールとして使うことについてはどう思われますか。

チェ デザインは社会的、経済的、政治的に重要な課題に対応するために大事なツールだと思います。教育者として私が懸念しているのは、全ての領域の学生や研究者を今後どうやって教育していくのかということです。違う専門分野の人たちも協力して、さまざまな社会問題に対応していかなければいけません。私が具体的に考えていることがあります。教育の現場でAIエンジニアや研究者、学生に対してデザイン思考の方法論を教えるということです。例えば工学の学生にデザイン思考を教えれば、AIの乱用やバイアスを排除することができる代替的な手法を考え出すことができるのではないかと考えています。

松尾 とてもよい考えだと思います。デザインというものをAI開発者に教えることで、彼らの活動の幅がより広がる。そしてより広い社会的な範囲をカバーできるようになると思います。AIをさまざまな業界、産業で使っていくためには、多くのステークホルダーとの対話が必要です。政策立案者、官僚、医師などとも対話が必要です。つまりデザイン思考能力は必要だと思います。デザインとい

うのは非常に学際的なプロセスです。例えば工学部でもそれぞれの専門分野がさらに分かれているところにデザインを取り込んでいく、デザインを学生に教える、というのは決してたやすいことではありません。チャレンジですが、その価値はあると思います。

認識されるデザインの価値

青木 デザインは人類が直面する大きな課題を解決するためのツールになりえるという話がありましたが、デザインをどうプロモートするか、その課題などありましたらお聞かせください。

ローソン 最近のデザインの歴史を振り返ると、20世紀の後半は、誰も見向きもしませんでした。例えば社会問題や人権問題解決の際に、デザインは注目されませんでした。デザインとはスタイル性を追求するとか、素敵な製品を開発して見栄えよく仕立て高い値段で売ることだと考える人たちが今もいます。しかしそれは少しずつ変化してきました。新しい世代はデザインというものを新たな目で見えるようになってきました。色々なデザインプロジェクトも誕生しています。人権、環境、社会などの課題を解決するプロジェクトでデザインは価値あるものだということが立証されています。だからこそ人々は耳を傾けることになりました。東京フォーラムでデザインをテーマに取り上げたのも素晴らしいことで、一歩前進している証だと思います。

オールジャパンで進む日本留学支援の取り組み

インドと東大

インド事務所を刷新しました

このたび「東京大学インド事務所」を刷新しました。インドには日本への留学経験（MBA）のあるハルゲン・ルトラ現地代表（In Country Representative）が常駐し、東京大学グローバル教育センターには、インドの教育に関する研究で博士号を取得し、インド国内で勤務経験のある塩山臯月特任助教が、本事業専属としてチームの仲間に加わりました。また、広報戦略としてSNS発信を強化。対面イベント、高校訪問等を組み合わせて、日本の高等教育の素晴らしさを積極的に広めるべく取り組んでおります。

この事業はインドだけでなく、スリランカ、パキスタン、ネパール、バングラデシュ、ブータン、モルディブと、広大な南西アジア地域をカバーしています。多くの先生、職員皆様のご協力を得ながら、キャンパスの多様性をさらに高め、日本の高等教育と研究の発展に貢献してまいります。また、東大の学生さんたちが、この地域を訪問し、大いに学びを得るよう、各種交換留学プログラムも検討中です。ご期待ください。



東京大学
インド事務所
所長
林 香里

東京大学インド事務所
→ <https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/utindia/>

この事業は、教育分野での連携を通じ日印関係を強固にする刺激的な機会となります。インドから日本への留学促進によって、経済的・文化的な成長への道筋をつけながら両国の文化横断的な交流、熟練した労働力の発展、学術交流の深化を育むことを目指します。



×



日本へ来る南西アジアの学生の数は少なく、なかでも人口14億人超のインドからは、全国でわずか1,500人程度。国外に留学するインド人学生は130万人を超えますが、日本は魅力ある留学先としてまだ十分に認知されていません。

東京大学は、2024年度より「日本留学促進のための海外ネットワーク機能強化事業」を受託し、インドをはじめ他の南西アジアの学生に日本の大学・大学院の魅力を認知してもらうための活動を開始しています。インド事務所を中心に諸機関と連携し、現地高校や大学で日本の高等教育を積極的に紹介、SNSを利用して日本で学ぶことの認知度を上げていきます。日印相互の人的交流を進めるため研究者派遣や全学交換留学協定の締結にも一層取り組む必要があります。南西アジアからの学生を増やすだけでなく、日本からの留学も奨励。南西アジアとの学術交流を活性化

教育・研究の世界で幅広く国際交流を積み重ねてきた東大ですが、最近はとりわけインドをはじめとする南西アジア地域との交流に力を入れ始めているって知ってましたか？ オールジャパン体制で進めている南西アジア地域との交流促進の取り組みの概況と歴史について、教職員としてあらためて理解しておきましょう。

し、より多様なキャンパス作りに貢献します。

今年度は、矢口祐人副学長、北村友人総長特任補佐の尽力もあり、インドのO. P. ジンダル・グローバル大学との会談（4月）を皮切りに、駐日インド大使とインド事務所所長との会談（5月）、留学コーディネーター委員会の開催（6月～）、インドの学校経営者向け留学説明会の開催（7月）、オンライン日本留学フェアへの参加（8月～）、インドの大型教育イベントAnnual IC3 Conference & Expoへの出展（8月）、大学・企業説明会や日本文化発信イベント「Mela! Mela! Anime Japan!」への出展（9月）、学内の南西アジア地域出身の学生・研究者との意見交換の場であるUTokyo South Asian Eveningの開催（10月）、日印大学等フォーラムへの参加（10月）と多くの活動を行ってきました。現地高等教育機関等に研究者を派遣し講演を行う「Japan Scholar」も開始する予定です。

日本留学促進のための海外ネットワーク機能強化事業（南西アジア地域）

STUDY in JAPAN

南西アジア地域（最重点国インド・バングラデシュ・スリランカ・ネパール・パキスタン・ブータン・モルディブ）からオールジャパンで高等教育機関への留学生受入を促進することを目標としています。本事業の活動は、オンライン・オンサイトの留学説明会、イベント出展、留学希望者等からの問い合わせ対応、日本留学についての広報など多岐にわたる活動を、再委託先のJASSO（日本学生支援機構）や関係機関とともに実施していきます。



インド事務所 ICR
ハルゲン ルトラ



グローバル教育センター
特任助教 塩山臯月

インドを始めとする南西アジアからの学生がこれまで以上に集うことで、本学の多様性と学生のみならず教職員も新たな価値観に触れる機会が増すでしょう。皆さんもまずは身近でも遠い国でもあるインドに着目してみたいかがでしょうか。

🌐 **インドにある東大建築**（インド工科大学ハイデラバード校）



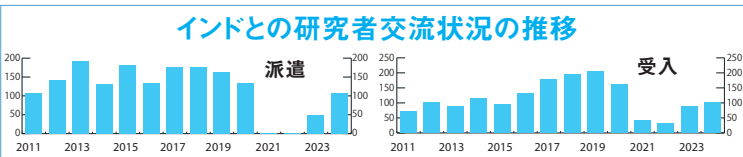
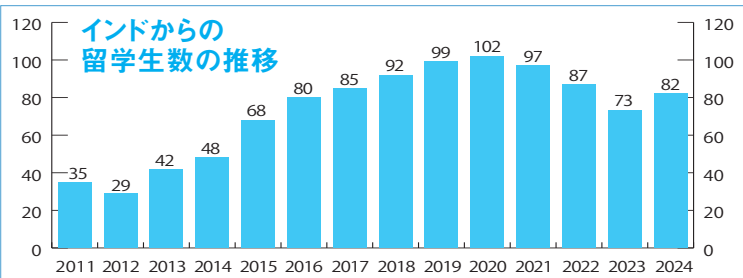
東大は2009年よりインド工科大学ハイデラバード校（IIT-H）の支援コンソーシアムに参画しています。キャンパスには、藤野陽三名誉教授（工学系研究科）、大野秀敏名誉教授（新領域創成科学研究科）、川添善行准教授（生産技術研究所）らが設計・デザインした建物があります。上の写真は今年10月、自身が設計した広々とした中央図書館のロビーに立つ川添先生と林香里理事。2月には大野先生が現地で開催を行い、IIT-Hの学生を激励しました。東大は日印の学術交流を様々な分野で活性化させ、IIT-Hの人材育成にも貢献しています。

🌐 **東大と国際交流協定を結ぶインドの大学等**

※2024年
11月末
時点

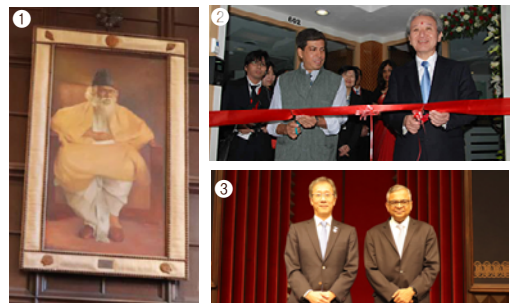
- ◎**全学協定**／インド工科大学カラグプール校、同カンパール校、同デリー校、同ハイデラバード校、同ボンベイ校、同マドラス校、デリー大学、O.P.ジンダル・グローバル大学
- ◎**全学学生交流覚書**／O.P.ジンダル・グローバル大学
- ◎**部局協定**／インド工科大学ルールキー校、タタ基礎研究所、タミルナードゥ農業大学
- ◎**部局覚書**／インド工科大学ボンベイ校、同ルールキー校、タミルナードゥ農業大学、デリー大学文学部・社会科学部

🌐 **データで見るインドと東大**



2024年度における国・地域別の東大への留学生数を見ると、最多は中国からの3,396人であるのに対し、インドからはわずか82人。東大からインドへ留学する学生数はさらに低調で、過去14年間を見ると、年間の派遣人数は0～4人となっています。また、研究者の交流も、新型コロナウイルスの影響から完全には回復していません。現在、インドには日本から多くの企

業が進出しており、その数は4,900社あまり。インドでは、アニメや自動車等の知名度から日本に対して好印象を持つ人に出会うことが多々あります。政治でも日印特別戦略的グローバルパートナーシップを結び、両国は互いを重要視しています。政治・経済やソフトの面で交流が活発化する現状を考えると、インドとの教育・研究交流の不足は大きな課題であると言えます。



- ①1957年にジャワハルラール・ネルー首相が来学した際に寄贈されたタゴールの肖像画が、総合図書館の特別閲覧室に展示されています。
- ②インド事務所開所式のテープカットの様子（2012年）。右から田中明彦副学長（当時）、シュリクリシュナ・クルカルニインド赤門会会長。事務所は当初バンガロールにありましたが、2015年にデリーに移転しました。
- ③日印国交樹立70周年の2022年に来学したTATAのナタラジャン・チャンドラセカラン会長（右）と藤井輝夫総長。



海と希望の学校 — 震災復興の先へ —

第35回

大気海洋研究所と社会科学研究所が取り組む地域連携プロジェクト——海をベースにローカルアイデンティティを再構築し、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取組み——です。東日本大震災からの復興を目的に岩手県大槌町の大気海洋研究所・大槌沿岸センターを舞台に始まった活動は、多くの共感を得て各地へ波及し始めています。

第3回 海と希望の学園祭 in Kamaishi によせて

社会科学研究所
比較現代経済部門 教授

中村尚史



2024年11月9日と10日の両日、岩手県釜石市で「第3回 海と希望の学園祭 in Kamaishi」が開催された。このイベントは、2022年以降、釜石市の主催で、東京大学から大気海洋研究所、社会科学研究所、生産技術研究所、先端科学技術研究センターの4研究所が参加して開催している、一般市民向けの大規模な文化祭である。今年は学園祭前日に、東大関係者による中学生向けの講義も行われ、ますます盛大になった。もちろん文京学院大学や岩手大学釜石キャンパス、釜石商工高校など他大学、高校、関係機関・企業の展示やワークショップなども素晴らしかった（写真①）。

生産技術研究所と先端科学技術研究センター、釜石市、岩手の大学生の皆さんなどによる「2050年カーボンニュートラルに向けて」というシンポジウムで開幕した学園祭は、「希望の船出」と題した4研究所長と釜石市長とのパネル・ディスカッション、大気海洋研究所、社会科学研究所、釜石海上保安部の関係者による「人と海をつなぐ『船』」と題したトークイベント（写真②）、映画上映会と充実した内容で、いずれも大入り満員

であった（写真③）。ほかにも沈没船に関する講演や、学術研究船「白鳳丸」の大きなバルーンオブジェ（写真④）、地元産品の軽トラ朝市など大人気のイ

ベントが盛りだくさんである。これだけ多くの人々が釜石に集い、市民とともに学び、楽しむ姿を目の当たりにして、20年近く釜石の浮沈を見守ってきた私たちは感無量であった。

2005年初頭に、私たち東大社研が希望学の総合地域調査ではじめて釜石に伺ったとき、釜石は地域再生への道を模索している最中だった。もがき、苦しみながら地域における希望のありかを探し求めていた釜石の人々は、地域のローカル・アイデンティティを再構築し、地域内外のネットワークを駆使しつつ、少しずつ地域の希望を再生しつつあった。その矢先に発生した東日本大震災の大津波で、釜石を含む三陸沿岸地域は壊滅的な被害を受けてしまう。しかし、再生しつつあった地域の希望は、釜石の復興を後

押しした。震災前に構築していたネットワークやローカル・アイデンティティ再構築のノウハウが、企業や市民が震災の衝撃を乗り越えるための重要なツールになった（東大社研・中村尚史・玄田有史編『地域の危機・釜石の対応』東京大学出版会、2020年などを参照）。

海と希望の学園祭は、地域内外の新たなネットワーク形成や、若い世代のローカル・アイデンティティの再構築に寄与し得るという点で、こうしたツールを再認識し、磨きをかける重要なイベントである。それは、東京大学がハード面のみならず、ソフト面でも地域創生に貢献できる可能性をも示している。今後は、釜石のみならず、他地域での展開も視野に入れていく必要があるのではないだろうか。



② トークイベント「人と海をつなぐ『船』」のパネルの皆さん



① 海と希望の学園祭 in Kamaishi チラシ



③ 海と希望の学園祭 in Kamaishi における東大関係展示



④ バルーンオブジェ・白鳳丸と海上保安庁マスコット・うみまる



「海と希望の学校」公式 X (@umitokibo)

バックナンバー→www.u-tokyo.ac.jp/ja/society/aid/sanriku.html

制作：大気海洋研究所広報戦略室（内線：66430）



ぶらり 構内ショップの旅

第31回

カフェアグリ101@弥生キャンパスの巻

種類が豊富な弁当や軽食

弥生キャンパスのフードサイエンス棟1階にある「カフェアグリ101」。温かい弁当やサンドイッチ、コーヒーなどを提供するテイクアウト専門店です。

主力メニューは、肉、魚、カレーなど種類が豊富な弁当。なかでも人気なのが、日替わりの「おまかせ弁当」AとB。弁当A（¥850）

は唐揚げやハンバーグといったメインのおかずが2種類入った、ボリュームがあるお弁当です。そして、野菜をもっと食べたいというお客様の声で誕生したのが弁当B（¥900）。ご飯の量を通常の半分にして、そ



店長の鈴木篤司さん

の代わりに7~8種類の野菜を入れたヘルシー弁当です。

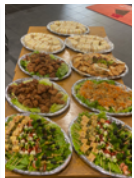
なるべく出来立てを食べていただきたいとの思いから、メインのおかずは注文を受けてから揚げたり、焼いたりしています。他にも「若鶏のから揚げ弁当」（¥880）、「サバの味噌煮弁当」（¥900）など、お弁当は全部で15種類。「最初はこんなに種類は多くなかったんです。お客様の要望などを受けて、新しいメニューを追加していくうちにこのようになりました」と話すのは店長の鈴木篤司さん。

お弁当よりも軽いものが食べたいとの声から誕生したのが、トーストサンド。ハムチーズサンド（¥400）、小倉ホイップサンド（¥440）など9種類がメニューに並びます。小腹が空く夕方時に購入する人が多いとか。最近登場したホットドッグも好評です。ケータリングサービスも行っていて、基本メニューはサンドイッチや肉・魚料理など7品（1人¥1500）。コーヒーポットの配達もあります。（10人分¥2160）。「予算やメニュー内容などできるかぎり対応いたします。是非メールでご相談ください」

cafeagri101@gmail.com



「若鶏の甘酢煮弁当」（¥830）。お弁当には、煮物や漬物、卵焼きといった惣菜も入っています。右上：ケータリングのオードブル。



営業時間 ●8時半-17時半。土日祝休み。

価格は税込

蔵出し! 文書館

The University
of Tokyo
Archives

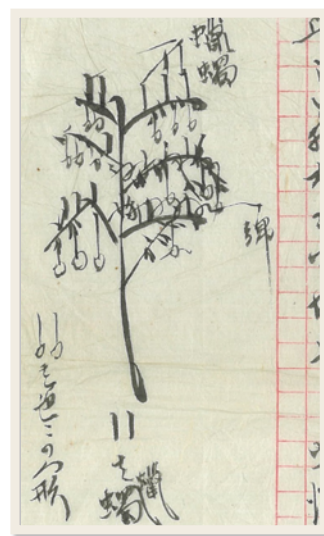
第53回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介します

非常の賑に有之候 ~ドイツのクリスマス

当館には、東京帝国大学第十代総長を務めた古在由直（1864~1934）の資料が寄贈されています（F0003「古在由直関係資料」）。足尾銅山の鉱毒調査や、関東大震災後の東京帝国大学の復興に尽力したことで知られる古在の、鉱毒関係調査資料、大学校務関係、書簡、写真など、総数600点を超す資料群です。

古在は出張中、母、妻、そして子供たちに、連日のように手紙や葉書（多くは滞在地の絵葉書を使用）を書き送っていました。農科大学助教時代の1895（明治28）年、古在はドイツ留学を命じられました。大晦日の12月31日、



F0003/S07/SS01/0312

日本にいる家族に宛てた手紙で、その数日前に体験したベルリンでのクリスマスを極めて詳細に伝えています。「先つ一種の松の枝ふりよきものを撰ひ…」／「日本にて「たなばた」に竹に紙片を結付るか如し」／「綿片を松の枝にちらし掛候此は雪をなそらふ…」／「銀色の針金にて作りたる細き繩を纏付け其上に蠟燭を無数に立て…」など、現地で見たクリスマスツリーの仕立てについてまず文章であらわし、さらに紙面余白に、ツリーの飾りつけの様子を、「蠟燭」、「綿」、「色々の人形」などと説明を加えながら描きました。ツリーの様子を忠実に伝えようとする様子に、思わず笑みがこぼれてしまいます。「家内のもの総出にて歌を歌ひ祭日を祝し…」などと、当地の習慣も事細かに記述するなど、異国の文化を興味深く捉え、観察した、古在の姿が想像できます。

手紙（葉書）の締めくくりには家族の健康を気にかける一言を必ず添え、幼い我が子に宛てるときには文章を全て片仮名で記すなど、温かな人柄を偲ぼせる古在総長の筆致を、ぜひ御覧ください。

(学術専門職員 星野厚子)

東京大学文書館

ワタシのオシゴト 第223回

RELAY COLUMN

医学部附属病院管理課
経理チーム主任

福代美樹

ルールに則り肅々と



真後ろにドア。すぐ来てすぐ帰れる自席

早速ですが職場自慢を。病院の魅力はなんといっても規模の大きさです。頼れる先輩・後輩に囲まれ、参照できる過去の事例も豊富。担当業務は調達契約で、高額な医療機器等の調達は手続きに長い時間を要しますが、無事納品された時はしみじみ「よかった…」と感じられます。

「診療や研究教育に携わる方々のお役に立ちたい」という思いとは裏腹に、手続き上の細かいお願いをしなければならず、自分の無力さを感じることも多々ありますが、ルールに則り肅々と、必要な経理事務手続きを進めることが今のワタシのオシゴト。いつも快く対応してくださるみなさまに助けられながら、黙々と働く毎日です。

終業後は子どものお迎えに急ぎますが、4月からは下の子も小学生。各種医療機器の耐用年数を超えるほど長く続いた毎日のお迎えも、ようやく終わりが見えてきました。職場のみなさまに改めて感謝するとともに、今後一層仕事に励みたいと思っているところです。



同僚と巨大ゴマ団子（病院から徒歩15分）

得意ワザ：船酔いしにくい（高校3年間船通学でした）

自分の性格：秘密（そう簡単には教えられません）

次回執筆者のご指名：杉田七海さん

次回執筆者との関係：笑顔で驚きの報告をしってくる同期

次回執筆者の紹介：明るい両足骨折経験者

デジタル万華鏡 第43回

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

工学系・情報理工学系等情報図書課
情報サービスチーム 係長

梅谷恵子

蔵書印・蔵書票から見る図書館

東京大学附属図書館には、長い歴史の中で受け入れてきた1,000万冊を超える蔵書があります。

工学・情報理工学図書館も明治の工部省から始まり、工学寮、工部大学校、東京帝国大学附属図書館、各時代の教授の個人蔵書など、様々な図書を所蔵しています。そこに押印貼付されている蔵書印・蔵書票は、これまで本が辿ってきた来歴を示すものです。それらを「東京大学工学・情報理工学図書館蔵書印・蔵書票データベース」で公開しています。

このデータベースでは、①時系列や蔵書印の使用者の系譜ごと、②蔵書印・蔵書票のタイトルが同一でも複数の版があるものは各版のそれぞれを一覧できます。組織名が変わっても印のデザインは継承されている、複数の学部間で印のデザインが共有されているといった変遷が、画面上に並べて表示することで分かりやすく見えてきました。また、デジタル画像は拡大表示が容易にできるというメリットがあります。過去の蔵書印譜では同一と考えられていた複数の印面・図版を拡大したら、細かい版の違いがあることも分かってきました。

また、工学・情報理工学図書館の蔵書からは、これまでに蔵書印譜に掲載されていない蔵書印や海外の研究者の蔵書票なども発見されています。データベースは紙の資料と異なり、新しい蔵書印・蔵書票が見つかる度に追加していくことができるのもメリットです。新しいデータはトップ画面の更新情報に随時掲載しています。

東京大学附属図書館の古い蔵書を手に取る機会があれば、そこにある蔵書印・蔵書票にも注目してみてください。もしかするとあなたが、未知の蔵書印・蔵書票の発見者になるかもしれません。

帝図大學圖書之印と
東京帝国大學圖書英国の博物学者F.D.
Godmanの蔵書票

https://curation.library.t.u-tokyo.ac.jp/s/ownership-stamp_db/page/home

インタープリターズ・第208回 バイブル

理学系研究科 准教授
科学技術コミュニケーション部門

鳥居寛之

SNS時代の民主主義

かの大国では、自国第一主義を掲げる前大統領がまた返り咲いた。大接戦を伝えるマスコミ報道を覆す圧勝だったのは、既存のメディアが世相を捉えきれていなかったからとも言われる。翻って我が国でも、マスコミであれだけ叩かれた関西の県知事が再び知事の座を手にした。まさかの逆転劇には、SNSでの情報拡散が大きく寄与したと言われている。

SNSが世論を動かす力、特にインフルエンサーの影響力が、いよいよ政治にも及んだとの衝撃をもって受け止められたり、マスコミが信頼を失った結果だとして当惑するテレビキャスターの発言が聞かれたりした。若者がSNSを情報源にしていることは当然のこととして、シニア世代までもがネット上の動画を見て意見が変わったと話す中で、ネットにこそ真実がある、と開眼させられたような顔でテレビインタビューに答える様が印象的だった。

テレビや新聞といったオールドメディアの人間からすれば、自分たちは必ず情報の裏付けを取り、根拠に基づいて取材を重ね、それを公平かつ中立に報道しているのに、との思いは強いだらう。それを、何の信頼性もない誤情報・偽情報溢れるSNSにお株を奪われるなんて。しかし、そもそもマスメディアが客観的で中立なのかというと、それを疑い、「我らこそ正義だ」と標榜してきたメディアに辟易していた人たちは多い。ひとたび不祥事が起きれば取材陣が群がってとことん叩くという報道姿勢や、報道の自由や編集権を楯に、自らの見解に合うように事実を切り取る、挙げ句の果てには曲解や捏造もありうる、といった状況が度々批判されてきたのも事実であろう。

件の知事選挙では、県政の改革を進める真面目な知事という評価が高まる一方で、パワハラや内部告発への不適切な対応は一般の企業でも普通にあることとしてさほど問題視しない世論が聞かれた（東大で毎年研修を受けている身からすると、世間の感覚に驚く）。

とにもかくにも、フェイクニュースも入り乱れるSNS上での組織的な影響力が熱狂を生み、対立候補が「何と向かい合っているのか違和感があった」と言う言葉に象徴される選挙は終わった。今回の結果は、ポピュリズムの台頭だとして、社会の改革を求める若者と既得権益側との世代間対立の表れだとする論考もある。今後の検証を待ちたいが、SNS時代に突入した社会のなかで、人々とのコミュニケーションをどう構築していくべきなのか、考えさせられる事象であった。

科学技術インタープリター養成プログラム

ききんの き

寄付でつくる東大の未来

第62回

ディベロップメントオフィス
アソシエイト・ディレクター 豊福詩織

学生の熱意がつなぐ寄付

10月19日に開催されたホームカミングデイ2024で、東京大学基金は「東大スポーツ応援！現役生トークテント～あなたの推しプロジェクトを見つけませんか？～」と題したブースを出展し、運動部を主としたスポーツ関連の学生団体5組（アメフト部、射撃部、柔道部、UTFF、B&W部）が参加しました。学生が実際に寄付募集活動を行うという新しい試みです。

参加した学生たちは、それぞれ工夫を凝らし、来場者の関心を引きつけていました。車のパーツを展示したり（UTFF）、自慢の筋肉を披露したり（B&W部）しながら呼び込みを行い、個性豊かでした。最初は呼び込みに戸惑っていた学生たちも、徐々に来場者が足を止め、活動の話に耳を傾けてくれるようになると、次第に自信を持って交流を楽しむ姿が見られるようになりました。来場者からは「自分もかつてこんな目標を抱いていた」と懐かしむ声や「ぜひ応援したい！」という温かい言葉が飛び交い、学生がその場ですぐ寄付をお願いし、多くの寄付が集まりました。

ブースに立ち寄った方が学生たちの声に耳を傾け、活動に共感し、応援の気持ちを伝える瞬間にはお互いに笑顔が広がり温かな雰囲気が生まれました。学生たちも寄付活動の意義を実感し、「参加してよかった」「寄付を呼びかける責任とやりがいを感じた」といった声が寄せられ、自身の取り組みが評価され、支援を得られる喜びを感じたようでした。

寄付を必要とする自らの言葉で一人ひとりに直接メッセージを伝えることは、共感を集めるためには最も効果的です。しかし、それを実現するのは現実的には難しく、アプローチできる範囲に限界があります。私たちファンドレイザーの役割は、当事者に代わって思いを伝え、寄付として応援を集めていくことです。

この日に目の当たりにした学生たちの熱意に負けないうれしさをもち、大学の活動の価値や必要性をもっと熱く、広く伝えていきたい。大切なことを再認識するホームカミングデイとなりました。



来場者の思い出や意見を真剣に聞く学生たちとファンドレイザー

東大基金の詳細はこちら↓



トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles) に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
11月11日	本部人事企画課	「令和6年度東京大学卓越研究員」20名決定
11月12日	本部渉外課、本部経営戦略課、本部ダイバーシティ推進課	UTokyoインクルーシブ・キャンパス構築プロジェクト 寄付募集を開始
11月12日	広報室	ガーナのバインにベトナムのエビ 生産から消費の間を捉える農産物研究＝鈴木綾 衛星画像だけでは見えてこない火山島の「人生」に上陸調査で迫る＝前野深 標高4300mの羊八井高原から宇宙線の起源を探る＝川田和正 ヴェスヴィオ山の北麓で進む遺跡発掘プロジェクト＝村松真理子 / 広報誌『淡青』49号「知の冒険者たち」
11月13日	広報室	数学の理論を使い「妬みのない」家事分担を実現する
11月14日	先端科学技術研究センター	「東大先端研・風洞ミュージアム設立基金」寄付募集を開始
11月14日	生産技術研究所	今井秀樹 名誉教授が令和6年秋叙勲 瑞宝中綬章を受章
11月14日	医学系研究科・医学部	グローバルナーシングリサーチセンターと文京区が連携協定を締結
11月15日	本部法務課	藤井輝夫総長の間接評価を実施
11月15日	本部渉外課、本部経営戦略課	「東京大学創立150周年記念事業募金」を開設
11月19日	本部経理課	サステナビリティボンド・フレームワークのセカンドオピニオンを取得
11月21日	教育学研究科・教育学部	留学生修学旅行を開催
11月21日	総合文化研究科・教養学部	言語情報科学専攻の小田博宗講師が新村出研究奨励賞を受賞
11月22日	本部渉外課、農学生命科学研究科・農学部	東大農学150 ⁺ 未来プロジェクト 寄付募集を開始
11月25日	大学総合教育研究センター	人気講座『The Power of Words』が11月25日に再開講
11月25日	教育学研究科・教育学部	留学生懇談会を開催
11月26日	宇宙線研究所	仏IN2P3とハイパーカミオカンデ実験についての覚書を締結
11月27日	情報理工学系研究科	社会人向け履修証明プログラム「データサイエンス本格養成プログラム」開始
12月2日	総合文化研究科・教養学部	超域文化科学専攻の今橋映子教授が第12回日本学賞を受賞
12月3日	本部学生支援課	応援部が本富士警察署より感謝状を授与！
12月5日	本部環境安全課	令和6年度 本部防災訓練を実施

表紙について

今号の表紙は、本郷キャンパス・工学部1号館前広場に登場したパブリックアート作品「木のないうちのツリーハウス」です。作者は青森県八戸市出身の彫刻家・ツリーハウス作家の木村勝一さん。東日本大震災で八戸も被害を受けたのを機に、津波で生じた廃材をモチーフにした折りのツリーハウス「再生の樹」のプロジェクトを開始したという木村さん。今回は、東大の創立150周年を前に芸術創造連携研究機構（ACUT）が企画した取り組み「内在するアート 大学における美とは何か」の一環として参加しています。

12月4日には現地では除幕式が行われ、津田敦理事・副学長、田中庸介ACUT副機構長とともにテープカットを行った木村さん。スピーチでは、「文京区の子どもたちに、勝手に登って勝手に遊んで勝手に汚してほしい」「(岡本太郎) 太陽の塔のように記憶に残るものになってほしい」と大声で語ってくれました。

ACUTのプロジェクトでは「東京大学アートセンター01_ソノアイダ」を通信機械室（理学部1号館横）に設置し、アーティスト・イン・レジデンスをはじめとするアートイベントを展開中。大学における「美」を考えてみたい人は現地へ！



ツリーハウスの定員は5人（大人も可）。2025年1月末まで展示予定。



冬の夜、日本酒で温もりのひとときを

寒い日が続くこの時期、体温まる日本酒はいかがでしょう。「淡青」純米大吟醸は、スクールカラー発祥の漕艇部OB会が発案・企画し、東京大学校友会の後援のもと商品化された特別な一品です。厳選された米と清らかな水、職人の技が織りなす純米大吟醸は、精米歩合50%以下の高精白米を使用し、フルーティーで華やかな香りと滑らかな口当たりが楽しめます。特別なひとときにふさわしい贅沢な味わいをぜひご堪能ください。帰省のお土産にも最適な逸品です。(田)



清酒「淡青」
純米大吟醸
720ml
化粧箱入
¥4,120
(税込)

清酒
「淡青」
特別純米
720ml
¥1,980
(税込)



UTCCから
のお知らせ

utcc.u-tokyo.ac.jp



→オンラインストア



CLOSE UP 本富士警察署より応援部に感謝状が授与されました (本部学生支援課)



運動会応援部の主将長尾翼さん

今年の秋の全国交通安全運動(9月21~30日)に合わせて実施された本富士警察署主催の交通安全パレードに、本学応援部が参加しました。この交通安全パレードに協力したことから、12月2日に本富士警察署および本富士交通安全協会主催の交通安全運動表彰式において、本富士警察署長及び本富士交通安全協会会長より、応援部に対して感謝状が贈ら

れました。応援部を代表して主将の長尾翼さんが参加しました。また、10月より東京大学と文京区はふるさと納税連携プロジェクトを開始しました。応援部もこの事業に参加しています。地域貢献事業一覧や寄付のしかたについては東京大学基金事務局のホームページからご確認いただけます。本学運動部へのご支援・ご声援をよろしくお願いいたします。



CLOSE UP 令和6年度の本部防災訓練に約600名が参加 (本部環境安全課)



安田講堂横の避難の様子

10月23日、令和6年度本部防災訓練が実施されました。本部では、災害時における一斉避難、災害対策本部の設置、災害対策班の活動などを行う防災訓練を平成20年度から毎年行っており、今回は本部教職員約600名が参加し、24部局との同日開催となりました。

今年度は、平日の日中に東京都と千葉県において震度6弱の揺れを伴う地震が発生したという想定のもと、藤井輝夫総長をはじめとする役員、本部教職員が一斉避難し、点呼確認や安否確認訓練を行いました。

その後、山上会館に全学災害対策本部を設置し、学内ネットワークが不通になったこと

を想定した「代替ネットワークの確保」、学外者に向けた「災害時公衆無線LAN(ファイブゼロジャパン)の開放」及び「Zoomによる駒場地区及び柏地区災害対策本部との情報連絡」という3つの訓練を主に実施しました。Zoomによる情報連絡は昨年度の訓練でも試行しましたが、インターネット回線が寸断した場合は使えないため、今年度は代替ネットワークとして、衛星インターネットサービスを併用して確実な通信環境を確保し、災害時の情報連絡体制の強化を試みました。また、本部教職員は各災害対策班に分かれ、総務部長の指揮のもと、様々な訓練を行いました。



CLOSE UP グローバルナースングリサーチセンターと文京区が協定を締結 (医学系研究科・医学部)



成澤廣修文京区長(右)と山本則子教授

医学系研究科附属グローバルナースングリサーチセンターは、人生100年時代の幸福寿命延伸に向けた連携に関する協定を文京区と締結しました。

本協定は、グローバルナースングリサーチセンターと文京区が相互の協力により、区民が住み慣れたまちで看取りまでを見据えて安心して生活し続けることができるよう、医療・看護・介護専門職等による多職種の緊密な関係づくりを推進するとともに、大学における教育研究活動の実践と成果の社会実装を

目的とし、結ばれたものです。

締結式には、成澤廣修文京区長と山本則子グローバルナースングリサーチセンター長ならびに、双方の関係者が出席し、執り行われました。今後、この協定をきっかけに、ケアに関わる多職種の連携をさらに深めるとともに、区民の健康やケアに関する知識と技術の向上を支援していきます。また、学術研究の成果を社会に実装することで、地域課題の解決に貢献し、区民の幸福寿命の延伸に向けた取り組みを加速させます。



CLOSE UP 留学生修学旅行と留学生懇談会を開催 (教育学研究科・教育学部)



JICA横浜 海外移住資料館にて記念撮影

教育学研究科・教育学部では、10月30日に恒例の留学生修学旅行を実施しました。本研究科・学部内に在籍する外国人留学生、引率の教職員の計31名が参加しました。今年度は神奈川県(日帰りバス旅行)にてJICA横浜海外移住資料館にて見学(展示解説および自由見学)をし、その後昼食をはさんでJICA横浜付近の散策を行いました。心配されていた雨も止み旅行日和となり、普段触れる機会の少ない日本の文化を存分に満喫すると共に、学生同士、また教職員とも親交を深め、大変有意義な留学生修学旅行となりました。

11月20日には教育学部ラウンジにおいて、新入留学生を歓迎して留学生懇談会を開催し、留学生、国際交流センターチューター及び教職員の計31名が出席しました。北村友人教授(国際交流委員会委員)の司会進行のもと、勝野正章研究科長の開会の挨拶ののち、懇談が始まりました。新しく入学した外国人留学生と在学留学生が自己紹介を行い、自身の研究や将来の夢、趣味などを話しました。最後に針生悦子副研究科長による閉会の挨拶があり、留学生、教職員、チューターらが一堂に会した交流の場は大盛況のうちに終了しました。



多様性がもたらす「本質」

近年、ダイバーシティ（多様性）の重要性が広く認識されるようになった。組織や集団に多様な背景を持つ人がいることでさまざまなメリットがあるという。その一つに「物事の本質が見えてくる」という点が挙げられると、個人的な経験からも思う。

筆者は博士課程からポスドクにかけての6年半ドイツ、ミュンヘンで暮らし、異文化に深く触れた。宗教や食文化だけでなく、例えば博士号の意味合いも日本とは少し違った。家やマンションの表札を見ると、苗字の前にDr.と付いていることがある。日本で博士というと、「変わり者」のようなイメージが伴うが、ドイツでは一般社会でも博士は一定の尊敬を集めている。世界を変える科学者を多数輩出してきた国の威厳を感じた。自己主張を重要視する文化に適応するのも苦労した。「黙っている者は、存在しないのと同じ」といった感覚があり、たとえ間違っていたとしても、自分の考えを述べるのが求められる。協調性が重んじられる日本とは対照的だ。

しかし、ドイツの方が優れているとか、日本の方が良いなどと思ったことはない。重要なのは、日本社会の価値観が絶対的な物ではないと知ったことだ。帰国した後も社会の風潮に流されず、自分らしく生きやすくなった。

現在筆者は、30カ国からの約1500名の研究者が参加する、Cherenkov Telescope Array (CTA) プロジェクトの一員である。チェレンコフ望遠鏡と呼ばれる特殊な望遠鏡数十台

を、各国が協力して開発している。複雑なシステムの部分部分を別の国の別の研究所で開発し、最終的にそれらを統合する。その接続部分で問題が起こることが多い。問題解決には当然、相手側と協力しなければならない。

筆者がよくやりとりするのはスペイン、ドイツ、イタリア、フランスの研究者たちであるが、文化の違いを感じる。フランスのチームは総じて、休暇が非常に多い。しかも、接続部の問題があっても、休暇が絶対優先である。安全性に問題がある可能性がわずかにあると言い出し、望遠鏡の試運転をストップさせたのはドイツのチームだった。この厳格さも国民性の表れだろう（精査の結果、問題はなかった）。逆に、きつとうまくいくと、何事も楽観的に考えられる人たちもいる。日本の感覚だと心配であっても、確かに8割くらいは杞憂に終わるので、あちらが正しいのかもしれない。

異文化が集まりながらも、CTAは順調に開発が進んでいる。それぞれ微妙に異なる考え方やプライドを持ってはいるが、よりよい望遠鏡を作りたいという思いは共通だからだろう。多様な文化のベクトルが混ざり合うことで、余分な要素は相殺され、本質的な成分だけが浮き彫りになり、それがプロジェクトの推進力となっている。

齋藤隆之
(宇宙線研究所)

